発達理論の学び舎

Back Number: Vol 140

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

2781. 噴き上げる詩への関心

2782. 希望に満ちた欧州三年目の生活

2783. 欧州生活の二年目を締めくくるために

2784. 近づく終わりと近づく始まり

2785. 明日から

2786. 最後の研究発表

2787. 研究発表を無事に終えて

2788. 論文提出から一夜が明けて

2789. 二つの嬉しい知らせ

2790. 涙と作曲について

2791. 『「ルーミー語録」解説』を読んで

2792. 詩的世界の流入

2793. 暗算・リーガ・長岡京

2794. 変容の里程標

2795. 芸術教育・霊性教育・投資教育

2796. 美容師メルヴィンとの対話より

2797. 初夏のある土曜日の始まりに

2798. 一瞥体験と叡智の泉

2799. オーロビンドとクリシュナムルティから

2800. 文化的な条件付けと人間発達

© YOHEI KATO 2018

2781. 噴き上げる詩への関心

たった今午後の仮眠を取り終えた。仮眠中、無数の千変万化するイマージュを知覚した。それは色鮮やかであり、柔らかい虹のスペクトラムがうねっているような映像として捉えられた。また、ペガサスのような生き物も知覚されていたと記憶している。こうしたイマージュを知覚するときはいつもそれを不思議に思うが、こうしたイマージュこそが文字情報や音声情報の映像を喚起する働きを司っているのだと思う。

午前中はショパンに範を求めて一曲作り、これからモーツァルに範を求めて一曲作りたい。その後に、明後日に控えている研究発表の予行練習を何度か行っておきたいと思う。

仮眠を取る前に“The Future Poetry (1985)”を読み終えた。シュリ・オーロビンドが詩について執筆した本書を読むことによって、また眼を開かれるような洞察を得た。本書を読み進めていると、やはりこれをきっかけに詩を読み始めようと思った。今は特に詩を創作することには関心はなく、もっぱら詩をゆっくりと鑑賞しようという態度でいる。

かねてから購入しようと思っていたリルケの英独バイリンガルの詩集とマラルメの英仏バイリンガルの詩集をこれから購入する。よさそうなものを探してるとオックスフォード大学出版から希望通りの詩集が出版されていたのでそれらを購入しようと思う。

リルケやマラルメ以外にも関心を引くような詩人はいないかと探していたところ、イスラムのジャラール・ウッディーン・ルーミーの作品を見つけた。ルーミーは、イスラム神学及びスーフィズムの権威的な人物であり、神秘主義に基づく数多くの詩を残していることでも有名だ。

リルケとマラルメの詩集と同様に、オックスフォード大学出版からルーミーの代表作“Masnavi”の英訳が四巻シリーズで出版されているのを見つけた。このペルシャ語の詩集が英訳で読めるのは非常に有り難いが、まずは四巻シリーズではなく、“The Essential Rumi – reissue: New Expanded Edition (2004)”を購入することにした。

ルーミーについて色々と調べてみると、私に多大な影響を与えてくれた井筒俊彦先生がルーミーに関する書籍『ルーミー語録』を出版していることを発見した。残念ながら同著を持っていないのだ

が、その代わりに本書を解説した文章が、手持ちの全集の第五巻に収められていることを知った。これは早速読んでみなければならない。

早速本棚から本書を取り出し、該当ページを開いてそこにしおりを挟んでおいた。明日にでも当該箇所に目を通そうと思う。

リルケ、マラルメ、ルーミーの詩集を購入することを決めた後、さらに調べてみると、ジッドゥ・クリシュナムルティも詩集を出版していることを発見した。クリシュナムルティに関しては、詩集のみならず、教育思想に関する書籍、そしてクリシュナムルティの日記の合わせて三冊を購入することにした。

詩を読みたいという強い欲求が突然吹き上げてくると、ふとフローニンゲンの街の古書店で先日眺めていたオーロビンドの詩集のことを思い出した。それは1000ページ近い大著であったことを記憶しており、その時の私は詩に対してなんとなく関心を持っていながらも、やはり中身を開いてみると詩の世界になかなか入っていくことができなかった。だが、本日噴き上げた関心に従う形で、明後日に研究発表を行った帰り道に古書店に立ち寄り、その詩集が売れていなければ購入をしたいと思う。この夏は、詩集を読むことを一つの大きな楽しみとしたい。フローニンゲン:2018/7/2(月)15:29

2782. 希望に満ちた欧州三年目の生活

時刻は午後の九時に近づいている。今日が月曜日であるということをすっかり忘れていた。

昨日までの休日となんら変わらないリズムで日々の時間が流れていく。夕日が黄金色の輝きを見せている。あと一時間半ほどで今日の太陽は沈んでいくだろう。

今日は作曲実践と読書を集中的に行った。明後日には研究発表が控えているため、明日は午前中と午後の二回に分けて発表の予行練習をしたい。また、夕方には論文の最終レビューを行う。このレビューは明日と明後日にかけて二度行い、明後日の夜に論文の審査官である二人の教授に送る。これをもってしてフローニンゲン大学での二度目の修士論文の執筆を無事に終えることになる。それが終われば完全に自由な探究に励むことができる。

欧州での三年目は旅を積極的に行い、日記と作曲を絶えず継続させていく。さらには、普段の生活の中で画集を眺めるだけではなく、本日購入した詩集を少しずつ読み進めていきたい。詩的世界が自分の内側にようやく入り込んできたことを大変嬉しく思う。

これまで何度も詩には近づいたり離れたりを繰り返していたが、今回はこれまでとは違うような感覚がある。詩をゆっくりと読む心のゆとりと時間のゆとりができたことにまずは感謝し、詩的世界が自分の内側に流れ込んでくるほどの成熟を遂げつつある自分の内面に純粋な驚きと喜びがある。

明後日の研究発表を終えたら、その足で街の中心部の古書店に立ち寄り、シュリ・オーロビンドの詩集を購入したいと思う。本当に明後日でフローニンゲン大学で過ごす二年目の生活が全て終わる。あっという間でもあり、長くもあった二年間だった。二つの相矛盾する時間感覚を内包する二年間だったが、一つ言えることは間違いなくこの二年間はこれまでの人生の中で最も深く有意義なものであったということだ。

ジョン・エフ・ケネディ大学に留学したあの二年間を凌ぐほどの充実さであったと言っていいだろう。それぐらいにこの二年間は自分に大きなものをもたらしてくれた。何よりもこの二年間は私を大きく変容させてくれたのだ。そのことをまず認め、これからの欧州での三年目の生活に入っていきたい。

本日購入した詩集の著者の一人であるルーミーは37歳の頃に詩に出会い、そこからしばらくして詩作活動に没頭したそうだ。その没頭の度合いは目を見張るほどであり、その期間にルーミーは膨大な詩を残した。単にそれは量的に膨大であったというだけではなく、詩的世界の真相を捉え、このリアリティの再奥を捉えたものであった。その詩集がイギリスの書店から到着することが待ち遠しい。

音楽、絵画、詩。この三つが三年目の生活の核になる。日記はその核を取り巻く器であり、同時にそれら三つのさらに深い核でもある。画集を眺め、詩集を読み、過去の偉大な作曲家の楽譜を参考にしながら作曲をしていく。そして旅を挟みながら、毎日絶えず日記を執筆していく。そのような生活がこれから始まろうとしている。とても希望に満ちた欧州生活三年目の始まりである。フローニンゲン：2018/7/2（月）21:02

© YOHEI KATO 2018

2783. 欧州生活の二年目を締めくくるために

今朝は六時前に起床し、いつもどおり心身を目覚めさせるためにヨガを行った。早朝のヨガも完全に習慣となり、改めて起床直後に行うヨガの効用を実感している。早朝に体温を上げることによって一日の活動への入りがとてもスムーズなものになっている。身体の調子を整えること。それがこの地上で生きる上でどれほど大事なことかを身をもって知る。文字通り「身をもって」である。

先日立てた仮説がかなり正しいように思える。それは何かというと、コーヒーと手荒れの関係に関するものだ。これまでの冬の時期がいかんせん寒さが厳しかったこともあり、毎日ホットコーヒーを随分と飲んでいた。今は毎日午前と午後に一杯ずつの合計二杯しか飲んでいない。カップもそれほど大きいものではないため、一日に摂取するコーヒーの量は随分と減った。コーヒーの量を減らしたことがやはり手荒れの改善につながっているように思えてくる。

今朝起きて手を見たとき、徐々に手荒れが改善されていることに気づいた。早朝に体温を上げることとコーヒーの量を減らすことという二つの変数を組み込んでしまったため、手荒れの改善がどちらの変数に強く左右されているのかは厳密にはわからないのだが、二つの実践を始めた時期などを考えると、どうもコーヒーの量を減らしたことが手荒れの改善につながっていると述べても良さそうな気がしている。この点についてはもう少し検証をしたい。

今朝の起床時は黄金色に輝く朝日を寝室でしばらく眺めていた。今朝は朝日をゆっくり眺めていたかった。そんな気分であった。

今日はこれから過去に作った曲を編集し、その流れを受けて一曲作りたい。今日もまたショパンに範を求めたいと思う。数週間前と同様に、再び作曲理論に関する旺盛な学習をしたいという動機が高まっている。明日の研究発表を終え、明後日から作曲理論に対する旺盛な学習を進めていく。

作曲実践がひと段落したら過去の日記を少しばかり編集し、午前中の間に明日の研究発表の予行練習を何度か行う。昨日の段階で何度か発表の練習を部分的にしていたため、今日は何度か通しで練習を重ねていきたい。昼食後には再び作曲実践を行い、仮眠を取った後に論文の最終レビューをしていく。昨日論文アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授から“Discussion”に対するフィードバックコメントをいただき、それに基づいてまず修正作業に取り掛かる。幸いにも修正箇所は多くないの

で、この作業が終わり次第、論文の最初から最後までを通読し、誤字脱字などを確認していきたい。論文の最終レビューを終えたら再び明日の研究発表の予行練習をする。

明日の研究発表は二年目のプログラムを締めくくる最後のイベントであるため、入念な準備をし、最後を納得のいく形で締めくくりたいと思う。今日も充実した一日になることを早朝の景色が物語っている。フローニンゲン:2018/7/3(火)06:43

【追記】

その後の日記でも書き留めたが、コーヒーと手荒れの関係性はそれほどないように思われることがのちにわかった。ただし、今も一日に飲むコーヒーは、コップ二杯ほどにしている(冬の時期は二杯半)。フローニンゲン:2019/1/27(日)08:28

2784. 近づく終わりと近づく始まり

気がつけば今日も午後の二時半を迎えた。とりわけ今日の時間の流れが早く感じたのはなぜだろうかと考える。時間の流れが早く感じる日もあれば、緩やかに感じる日もある。人生とはそのように流れていくものなのかもしれない。

今日のフローニンゲンの天気も申し分ない。爽やかな気温であり、昼食前に近所のスーパーに向かって歩いている時は本当に心地良かった。

今朝から自宅の目の前の歩道が舗装工事に入った。正直なところ、舗装工事が必要なほど痛んでいるわけではなかったのだが、公共事業というのは何か特殊な論理によって動いているのだろう。幸いにもドリルを使うような工事ではなく、騒音はそれほどないようだ。歩道を構成する石版を一つ一つクレーンで剥がし、その後新しい石版を置いていくらしいことが作業の様子からわかった。

せっかくの機会なので少しばかり工事の様子を観察していた。明日以降も工事が続くようなので、工事が続く期間中は書斎の窓から工事現場を眺め、その様子と進捗を観察したい。

詩集を読み、画集を眺め、楽譜を参考にしながら作曲すること。そして日記と読書。それらが欧州での三年目の生活で最優先されることである。これについてはここ数日間何度も繰り返し確認して

いる。特に詩集を読むことが加わったのは私にとって大きなことであり、これからの日々がそして今後の人生がより豊かになっていくことを確信している。

いつか日本の詩や俳句などを日本語で読みたい。詩的世界が自分の内側に流れ込んできたことは本当に突然のことであり、それは発達の非線形性を物語っている。

詩的世界に触れることによって自分の言語世界が必ず変容していくだろうことを予感する。言語世界の変容は即精神の変容をもたらす。実際にはその関係は逆のこともあり、言葉と精神は互いに影響を与え合っているのだ。いずれにせよ、詩集をこれから少しずつ読み進めていくことによって、自分の内側の世界が変わっていくだろう。それはきっとより深いものになっていく。

人生がより深く、より豊かになっていく。内面の豊かさを求めることは何の欲求だと言えるのだろうか。確かにそれは欲求の一つに違いないだろうが、他の諸々の欲求とは質を異にしていることを感じる。

日々を深く生きたいという気持ち。これからの内面生活をより豊かにしていきたいという気持ち。それが静かに溢れ出してくる。

今日はこれから論文の最終レビューを行う。予定通り、まずは“Discussion”セクションのレビューから始め、その後論文の最初に戻る。全体を最初から最後までレビューし終えたら、その流れで明日の発表に向けた予行練習を行う。こちらに関しては念入りに行っておきたい。これはフローニンゲン大学で行う最後の発表であるから、自ずと気持ちが高まっていく。明日の午前中の発表を終えたら、フローニンゲン大学での二年間のプログラムが無事に終了したことになる。

明日全てから解放される。解放後はもう何も気にすることなく自分の探究したいことだけを日々探究し、毎日創造活動に打ち込んでいく。明日からそのような日々が実現されるのだ。そしてそれは今後一生涯続く自らの歩みの始まりにすぎない。ようやく何かが始まろうとしている。しかもそれは巨大なものにつながる何かだ。フローニンゲン：2018/7/3（火）14:48

2785. 明日から

時刻は午後の七時半を迎えた。先ほど夕食を摂り終え、これから一日の最後の仕事に取り掛かる。午後より論文の最終レビューを行い、それが無事に終了した。明日にもう一度最初から最後まで通して読み、明日の夜に審査官の二人に論文を送る。論文の提出をもってしてフローニンゲン大学での二年目のプログラムが無事に終了する。

論文のレビューを先ほどし終えた後、夕食前に一時間半ほど明日の研究発表の予行練習をした。これから就寝前までの時間を使って何度か練習を重ねたい。明日の発表が始まるのは午前11時であるから、明日の早朝にも何度かプレゼン資料を見直す時間がある。最後の発表を納得のいく形で終えるためにも準備はできる限り入念に行っておきたい。

今日は基本的に論文のレビューと研究発表の練習に多くの時間を使っていたが、それでも一曲ほど曲を作ることができた。バッハが作曲した二声のコラールのうちの一つを参考にして短い曲を作った。このように仮にその日に取り掛かるべきことが他にあったとしても、少しでも作曲実践を前に進めることができて嬉しく思う。できる限り起床直後の時間は創造活動に充てる時間としたい。

明日の朝も発表の予行練習の前に過去に作った曲の編集を少し行うなど、とにかく朝の時間は創造活動に従事することを完全な習慣としたい。早朝の時間に何をどれほど取り組むかが今後の大きな差を生み出すだろう。朝の時間は創造活動に充てる時間だと強く認識し、明日からもまた日々を大切に過ごしていきたい。

明日は研究発表を終えたら、街の中心部のレストランで昼食を摂り、その足で銀行に立ち寄り、住所を証明するために残高証明を発行してもらおうと思う。銀行に立ち寄った後に古書店に立ち寄り、シュリ・オーロビンドの詩集を購入する。

すでに昨日にルーミー、リルケ、マラルメなどの詩集を購入しているが、他に何か良い詩集が古書店に置かれていないかどうかも吟味したい。古書店に立ち寄った後は行きつけのチーズ屋を訪れる。そしたら明日の用事は全て完成する。自宅には夕方に戻ることができるであろうから、そこから数時間ほど論文の最終レビューを行って論文を提出する。

先日に述べたように、明後日からは作曲理論と芸術教育に関する書籍を旺盛に読み始める。美学の関連書籍も読み進めていく。

学術機関に所属している身分のおかげもあり、毎年夏休みは長く、その期間は旺盛な読書を行うことができていた。今年の夏休みはさらに長いものであることが嬉しい。その期間に旺盛に読書を行い、それ以上に日記の執筆と作曲実践を旺盛に行っていく。七月のデ・ホーヘ・フェルウェ国立公園への短い旅行と八月のフィンランドへの旅行も今から非常に楽しみだ。今年の夏はこれまでの二年間以上に充実したものになるだろうと確信している。

自己が日々深まっているのであれば、充実感も日々深まっていくのだ。そうであればこの夏がこれまでで最も充実したものになると考えて間違いはないだろう。フローニンゲン：2018/7/3（火）19:56

2786. 最後の研究発表

今日は六時に起床し、六時半を過ぎた頃から一日の活動を開始した。今日はいよいよフローニンゲン大学での二つ目の修士課程を終える日となる。厳密には本日は卒業式ではなく、この一年間に行っていた研究の発表と修士論文の提出をする。研究発表を行う会場は、街の中心部から少しばかり東に行ったところにあるキャンパスだ。

私の発表は11時からスタートであり、会場まで歩いて25分ぐらいかかるので、10:20ぐらいには家を出発したいと思う。今朝はこれから研究発表に向けて最後の準備をする。昨日随分と発表の予行練習を行ったため、今朝はそれほど繰り返し練習をする必要はないかもしれないが、それでも念入りに準備をしておきたい。今朝方改めて発表の要綱を確認すると、昨日練習していた感覚だと発表の規定時間を超えてしまいそうであることに気づいた。

これからもう一度発表資料を見直し、削れる部分は削っておきたいと思う。発表時間が15分であることを考えると、本当に重要なことだけに絞って説明をしていく必要がある。最初のイントロダクションについてはもうすでに随分とコンパクトであるため、そこは削りようがない。研究手法の解説についても、「標準分散化解析」を理解してもらうためにはある程度の説明が必要であり、今の説明以上に簡素にするとわかりにくくなってしまうだろう。一方で削ることが可能でありそうなのは、結果とディス

カッションのところだろう。今回はリサーチクエスチョンが随分と多かったので、その中でも最も重要なものに絞って紹介し、それらの問いが一連のストーリーを持つようにしたい。

結論部分についてはすでに簡潔にまとまっているためここも削ることはできない。結果とディスカッションの部分の分量を減らすことを早朝にまず取り組みたいと思う。この修正はそれほど時間がかからないだろう。修正後、再び何度か発表の練習を最初から通しで行いたい。そうしたことを行っていれば、自宅を出発する時間になるだろう。

今この瞬間のフローニンゲンの空は晴れている。白い筋のような薄い雲が所々に見えている。今日は気温も爽やかであり、最高気温は20度前半だ。天気予報を確認すると、七日後まで今日と同じような気温の快晴が続くそうだ。

夏のこの時期の人々の活動時間はとても早い。今ようやく午前七時を回ったところだが、もうすでに自宅の目の前の道路の舗装工事が始まった。見ると、砂利をかき分け、これから石版の張り替えが行われるようだ。

今日のような恵まれた天気の中を歩くのはとても気持ちが良いだろう。発表会場まではとても良い散歩になる。下手をすると、発表会場までの道のりを歩くことは今日が最後かもしれない。それを踏まえた上で会場までの道のりの一歩一歩を味わいたいと思う。私たちの一生は一歩一歩の味わいによって深みを帯びていく。

風のない穏やかな朝の景色を眺めながら、発表に向けた最後の準備にこれから取り掛かりたい。フローニンゲン：2018/7/4（水）07:10

2787. 研究発表を無事に終えて

先ほど自宅に戻ってきた。今日は午前中に、この一年間を費やして行っていた研究の発表を行った。自宅から発表会場までの道のりは、どこか輝いて見えた。実際に午前中のその時間帯の太陽はとても力強く輝いていた。気温は涼しく、散歩するには何よりの気候だったように思う。会場に到着すると、偶然にも論文アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授と建物の前で出くわした。

挨拶もそこそこに、先日ロンドンで行われた学会の感想をツショル教授に尋ねたり、今日の発表の話などをした。ツショル教授と話をしながら、発表を行う会場に到着すると、そこではまだポスタープレゼンテーションが行われていた。

二月に入学をした修士課程の学生たちが各々の研究内容について発表をしているようだった。以前に紹介したように、今年所属していた教育科学学科には留学生は私しかおらず、基本的に他の60名近い学生たちは皆オランダ語のプログラムに所属している。その中で、私の友人のハーメンだけは英語で提供されるコースを積極的に履修したり、私と同じ英語での研究グループに参加するなど、積極的に英語で学びを深めようとしていた。

発表会場に到着した時、すでにハーメンがその場にいて、オランダ語でポスタープレゼンテーションの発表者と何やらやり取りをしていた。ポスタープレゼンテーションが徐々に収束に向かっていくのを眺めながら、私は部屋のモニターに自分のパソコンをつなげ、パワーポイントを用いて行うプレゼンテーションに向けて着々と準備を進めていた。発表の時刻に近づくと、数名がハーメンと私の発表を聞きやってきてくれた。

今回のフォーラムのパンフレットが全てオランダ語で書かれている中で、私たちの発表の枠のところだけが英語で表示されており、それはとても目立っていた。もちろん、教育科学学科の全ての学生は英語を話せるが、やはり彼らにとっては英語の発表を聞くよりもオランダ語の発表を聞く方が好ましいのだろう。実際にハーメンと私のプレゼンテーションを聞きに来てくれた聴衆の一人がそのようなことを述べていた。

時計の針が11時を指したところでまずは私の発表から開始した。他の部屋での発表は基本的に三人が一人ずつ行うことになっており、一人の発表時間は必然的に短いものになっていた。一方で私たちの部屋の発表者は二人であるから、一人当たりの発表時間を比較的十分に確保することができ、私はゆっくりと説明をするようにした。

数日前から念入りに準備をし、今朝も予行練習を何度か行ったことが功を奏し、納得のいく形でプレゼンテーションを行うことができた。その出来はアムステルダムの学会での発表よりも随分と良かったように思う。実際に、プレゼンを聞きに来てくださっていたツショル教授からも大変高い評価を得

た。念入りな準備の大切さ、そして何よりこれまでこの研究を情熱を持って取り組んできたことが、発表の質に現れていたのだろう。

発表を無事に終えたことに今はとても安堵している。これから夕食までの時間に、論文の最終レビューを行う。そのレビューが終われば、論文審査官の二人に提出する。それをもってしてフローニンゲン大学での二年目のプログラムは無事に終了となる。二年目のプログラムを通じて得られたことは本当に多かったように思う。これから集中して論文のレビューに取り組むことにする。フローニンゲン：2018/7/4（水）16:47

2788. 論文提出から一夜が明けて

フローニンゲン大学での二年目のプログラムを終えた翌日の今日。今朝は六時半に起床し、七時から一日の活動を開始した。昨夜は論文の最終レビューを念入りに行っていたため、いつもの就寝時間よりも30分ほど遅く就寝した。レビューを終え、私は二人の論文審査官に論文を提出した。その時にフローニンゲン大学での二年目のプログラムを無事に終えたことに対する大きな安堵感と静かな歓喜が溢れ出してきた。こうした安堵感と歓喜を味わったのは久しぶりのような気がする。

おそらく昨年にフローニンゲン大学での一年目のプログラムを終えた時にも似たようなものを感じていたのだろうが、昨年のそれとはまた少し違うような気がしている。今回の気持ちは、既存の探究に区切りをつけることと全く新しい探究に乗り出していくことからもたらされる特殊な感情だったように思う。

論文の提出を終え、本日から新たな門出となる。この日をどれだけ待っただろうか。

探究したいと強く望む事柄だけを探究し、納得のいくまで創造活動に打ち込む生活。そうした生活こそ人間を人間たらしめることにつながり、生の深い充実感を味わわせてくれることにつながるのだろう。こうした生活が真に実現されていなかったこれまでの生活と自分のあり方がおかしかったのであり、これから始まる生活がおかしなわけでは決してないのだ。ようやく真に正常な生活が始まる。

望む探究と創造に望むだけ従事するという当たり前の生活をこれから毎日送っていく。もう以前の生活には決して戻るまいと思う。今日から全てを新たにして日々を過ごしていく。

欧州での三年目の生活が始まるまでにあと一ヶ月ほどある。今日からは本当にこれまでとは異なるほどに、静寂の中に激情を抱えながら一日一日を過ごしていく。そうした日々を過ごすことでしか辿り着けない場所に向かって歩いていく。

昨夜は二年目のプログラムを終了したことによる興奮を鎮めながら眠りについた。ここ数日間は夢を見ていたとしてもその印象はとても薄く、夢について何ら書き留めることができなかった。今朝方の夢の印象も全体としては薄いものであるが、断片的に覚えていることがある。夢の中で私はある著名なピアニストの見舞いに行っていた。

そこは病院というよりも、何か一軒家のような、あるいは一つの城のような場所であり、その一室にそのピアニストはベッドの上で眠っていた。その側に彼女の母親が付き添っていた。

私はまず彼女の母親に挨拶をした。横たわっているピアニストの容態について彼女の母親に伺った。しばらく安静にしておく必要があるとのことである。ベッドの上で静かに眠っているピアニストの顔はとても白く見えた。病気がもたらす青白さとは別の白さがあったように感じた。

しばらくすると、そのピアニストの婚約者が部屋にやってきた。母親はベッドの上の彼女を起こそうとするが、彼女は一向に目覚める気配はない。母親は何回か彼女を起こそうとしたが、彼女が目覚めることはなかった。彼女の婚約者を含め、私たち三人はしばらく話をしていた。するとある時突然そのピアニストが目を覚ました。

静かに目を開け、辺りを見渡すよりも先に彼女の婚約者と私の方を見た。その瞬間に彼女は微笑んでいた。しかし、彼女は一言も言葉を発しないままに、また眠りに向かっていこうとしていた。そこで私は目を覚ました。

この夢についても様々な示唆が含まれているように思う。今それらの示唆についてはわからないものが多いが、夢の中の登場人物が眠りに向かうのとは対照的に自分が目を覚ましたことは興味深い。ここにも対極性という現象が見られる。夢から覚めてしばらく経っても、ベッドの上で眠りについていたピアニストの穏やかなあの表情を忘れることができない。フローニンゲン：2018/7/5（木）07:35

No.1114: A Running Tiny Dog

It is very chilly today, though it is still early August. I closed the window. I've recently wondered about whether my beloved dog at my parent's house is fine. Groningen, 07:41, Friday, 8/10/2018

2789. 二つの嬉しい知らせ

今日は久しぶりに一日中曇りのようだ。これまでがあまりにも天気が良かったため、早朝に曇った空を見たときには逆に懐かしさを感じた。思い出してみれば、初夏を迎えるまでは本当に天気が優れない日が続いていた。それとは対照的に、特にここ最近は本当に快晴の日々が続いている。

天気予報を確認すると、明日以降からまた晴れるようであるから今日は中休みなのかもしれない。まさに私もフローニンゲン大学での二年目のプログラムを昨日に終え、今日は中休みとして捉えていいのかもしれない。

確かに今日も探究活動と創造活動に従事していくが、本格的な探究活動と創造活動に向けたトランジションの期間に今はあると位置付けてもいいだろう。気温に関しては昨日とあまり変わらないのだが、曇っているせいか昨日よりも涼しく感じる。今日の最高気温は21度とのことである。明日以降も同様の気温が続く。

時刻はまだ七時半なのだが、自宅の目の前の道路の舗装工事が始まっているようだ。書斎の窓から少しばかりその様子を眺めてみると、作業員たちは作業服を着るわけではなく、私服を着て作業に取り掛かっている。作業現場の近くには二人の近隣住民が立っており、工事の掲示板を眺めながら何かを話している。少しずつ進行していく工事のように、今日もこれから自分が取り組むべきことに取り組み、着実な進行を遂げていきたいと思う。

ここ数日以内に、二つほど喜ばしい知らせがあった。一つには、小学校時代から付き合いのある親友が結婚をしたことである。彼とは7歳からの付き合いであるから本当に長い付き合いだ。今でもこうして友人関係が続いていることをとても嬉しく思う。それ以上に、彼が結婚をしたという知らせは大変嬉しいものであった。この秋に結婚式があるようであり、式に招待してくれた。

彼も私がオランダにいることをわかって声をかけてくれたのだが、秋に日本に一時帰国することが難しいため、残念ながら式に参加することはできない。その分も含め、とにかく彼に祝福のメッセージを伝えた。

親友が結婚したという嬉しい知らせの後、昨日も同様の嬉しい知らせがあった。私の論文アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授が婚約したという知らせを昨日教授と話した時に聞いた。ツショル教授はすでに50代を迎えているような年齢であるため晩婚のようであるが、とにかくめでたい知らせであった。相手は米国の大学に努める学者のようであり、結婚に合わせて米国に移住するようである。その知らせを聞いていた場には私以外にもツショル教授から指導を受けている友人のハーメンがいた。ハーメンと私はツショル教授の婚約を心から喜び、ツショル教授がフローニンゲンを離れる九月の前に一度ご飯にでも行こうという話になった。

親友とツショル教授の幸せな知らせは私の心を本当に暖かいものにしてくれた。そのような嬉しい知らせとその時の自分の気持ちを一日経って思い出している。フローニンゲン：2018/7/5（木）08:01

No.1115: After A Sudden Shower

I found a rainbow in the sky just a couple of minutes ago. Then, it suddenly started to rain, but now it stopped. I supposed that a rainbow often appeared after rain, yet today's rainbow had an opposite process. I'll briefly investigate conditions and mechanism of generation of rainbow. Groningen, 07:53, Friday, 8/10/2018

2790. 涙と作曲について

穏やかな風が吹き抜けるフローニンゲンの朝。今吹き抜けていくこの爽やかな風を感じ、風を眺めていると、この人生においてどこまでも歩いていけるような気がしてくる。

どこかはどこでもなくて今ここなのだろう。どこかに向かって歩くということは今の中心を歩くことが中心になければならない。今の中心の中を歩き、どこかに向かって歩いていく。結局そのどこかも今ここでしかないのだ。自分の人生が今日も静かに進んで行く。

今朝方の夢について再度思い出す。早朝の日記で書き留めていた場面とは違う場面についてふと思い出した。夢の中で私は、何かに対して感動をし、感動のあまりに涙を流していた。この現象は欧州で生活を始めて以降時折体験するものである。しかし、その現象について今日は改めて立ち止まって考えていた。

夢の中で何かに対して感動しながら涙を流すこと。人は夢の中でも泣けるのである。

数日前に、幼馴染みの親友から結婚の知らせを受けた。メールの中で彼は結婚相手の奥さんについて一言、「人のために涙を流すことのできる優しい人です」と述べていた。その一文には心を打つものがあった。

涙を流すという現象、そして涙の源泉について私はもっと真剣に考えなければならない。ここにきっと人として生きる上で大切なものが隠されているにちがいない。

早朝に引き続き、今もまだ曇り空が広がっている。だが、どこからともなく歌が聞こえているかのようだ。昨日フローニンゲン大学での二年目のプログラムを終えたことに対する祝福の歌が聞こえてくるかのようである。

今日もこれからゆっくりと作曲実践に取り組みたいと思う。今日はまずはバッハの変奏曲に範を求める。バッハの二声のコラールに範を求めることが最近は多く、変奏曲からはしばらく離れていた。今日は再び変奏曲に戻る。

ここ最近はショパンの曲を毎日参考にしていたが、今日はもしかしたらショパンに範を求めることはないかもしれない。このように、核となる作曲家を数名ほど定めておいて、彼らの曲を循環するように作曲実践を行っているのが今の自分の姿だ。当面はこのような進め方をしていくことになるだろう。

昨日、研究発表を終えて街の中心部を歩いている時、マルティニ教会の頭部が見えた。昨日は時間があったため、私はゆっくりとマルティニ教会の方に近づいていった。教会の真下に到着し、改めてそこから教会を仰ぎ見た。その荘厳さに息を飲んだ。

© YOHEI KATO 2018

以前から河や空などの景色をモチーフにして曲を作りたいと思っていたが、今はそこからさらに、マルティニ教会などのように印象に残る建物をモチーフにして曲を作りたいという思いになっている。

マルティニ教会を眺める時の心情はいつも必ず少しばかり異なっており、それが必然的にマルティニ教会に対する印象を変え、この教会が自分にもたらす感覚も変化する。その感覚を曲として形にし、同じ対象物に対して何度も曲を作ることによって、内的感覚の変遷を捕まえたいという思いが湧き上がってくる。それを実現させるためには相当な技術が必要になり、これからの精進が本当にカギを握るだろう。今から取り掛かる作曲実践はそこに繋がる道の上を歩くものにしなければならない。フローニンゲン：2018/7/5（木）09:49

No.1116: An Abyss of Ocean Depths

I suppose that there is a deeper realm in our unconsciousness than an abyss of ocean depths. What does it look like? Groningen, 09:16, Saturday, 8/11/2018

2791.『「ルーミー語録」解説』を読んで

「あぁ、これまで自分が学んできたことの多くは顕教的学問だったのだ。決して秘教的学問ではなかったのだ」という気づきがどこからともなく降ってきた。この気づきについてはもう少し説明を加える必要がある。オランダでのこの二年間において、私は形式上は生粋の発達科学の道の上を歩いていた。それはまさに人間の発達を科学的に探究する道であり、それは多分に顕教的特性を持っていた。オランダでの二年目の学究生活が終わりに差し掛かる頃、もはや私はこうした顕教的な学問にそれほど関心を示していないことに気づいた。

実際には、こうした気づきは昔からあった。そうした気づきは日本の大学の学士課程にいた頃にすでに芽生えていたと言えるだろう。そこから私は数年の社会人生活を経て、ある種秘教的なものを学びに米国の西海岸に渡り、ジョン・エフ・ケネディ大学に留学した。その頃から既に秘教的なものへの関心が絶えずあり、探究を少しずつ行っていたのである。それがここに来て、形を変える形で一気に吹き上げてきた。

先ほど私は、井筒俊彦先生の『「ルーミー語録」解説』を読んだ。数日前に偶然にもこのペルシャの偉大な詩人ルーミーと出会った。そして間髪を入れずにルーミーの詩集をイギリスの書店に注文した。そのような折に、日本語でもルーミーについて調べていると、井筒先生の仕事に出会ったのである。幸いにして偶然にも、井筒先生が『ルーミー語録』について解説している文章が手持ちの全集の中にあることを知った。

今日は先ほどその文章を読んだ。井筒先生の解説文を読めば読むほどに、ルーミーという詩人に多大な共感の念を持ち、同時に大きな感銘を受けた。ルーミーはまさしく覚者であった。

井筒先生の解説文を読みながら、欧州での生活を境に突如して吹き上げた創造活動に従事するエネルギーに関する正体が分かってきた。それは端的には、やはり私が以前から自分なりの言葉を当てていたように、この世界の創造を司る基底に自らが触れていることから生じるものだったのだ。井筒先生の言葉を用いれば、それは「根源的形象の世界」と呼ばれる。この呼び名がもう手に取るようにありありと分かる。

底知れぬ創造の泉から湧き上がる形になろとするものと寄り添いながら生きていくことは何らおかしなことではなかったのだ。そしてそれが形になるために様々な形象方法を必要とすることも実に必然的なのだと知る。自分の場合、その形象方法は言葉、音楽、絵である。日々、日記を書き、作曲を行い、デッサンを行う形でしか毎日を過ごしていけないというのは至極まっとうな生き方だったのだ。

自分の内側から本流するこの抗しがたい創造の流れの中で形になることを望むものを形にしていくこと。これをとにかく生涯にわたって続けていこうという気持ちを新たにする。

これからまた井筒先生の文章の続きを読み、その後に作曲実践を再び行う。自分の内側で形を待つものに形を与える創造行為以外の事柄に従事するのは本当に今年で最後にしよう。今年のうちに諸々のことを清算し、創造活動だけに従事する生活に入る。もうその生活には他者も世間も入れないようにする。人知れないところでただ形だけが絶えず生み出され続けているということだけが、自分にとっての最優先事項なのだ。フローニンゲン：2018/7/5（木）16:19

No.1117: An Effervescent Little Bird

This world is rife with adorable living creatures. A tiny bird that came to the window of my study is one of those lovely and precious creatures. Groningen, 09:34, Saturday, 8/11/2018

2792. 詩的世界の流入

時刻は午後の七時半を過ぎた。今日は天気予報の通り、一日中曇り空であった。今もまだ灰色の雲が空を覆っている。

フローニンゲン大学での二年目のプログラムを終えてからの最初の一日が緩やかに終わりに近づいている。先ほど浴槽に浸りながら、「客員研究員として米国の大学院に所属することにならなかったことには意味があったのだ」とふと思った。仮に秋から米国の大学院に客員研究員として所属することになっていたら、欧州での三年目の生活で想定しているような探究活動と創造活動は実現されなかったであろう。そうしたことを考えると、これは一つの幸運であり、運命の導きであったように思う。

夕食を摂る前に一階に降りて郵便受けを確認した。すると二冊の書籍がドイツのアマゾンより届けられていた。一冊はマラルメの英仏訳の詩集“Stephane Mallarme: Collected Poems and Other Verse (2006)”であり、もう一冊はルーミーの詩集“The Essential Rumi (1995)”であった。二冊の書籍が届けられた時、いよいよ詩集を読む時期に差し掛かったことを知る。

今はまだ書きたくなかったのだが、いつか詩を作るようなこともありうるのではないかと思う。私にとってそれは嫌な予感である。これ以上創造手段を増やしていいものかと悩んでしまう。今の自分にとっては詩作を通じた表現活動は、自分の資質では手に負えないものである。だが、いつか詩作を試みる日が来てもおかしくはない。しばらくは詩を通じた自らの言葉の彫琢と詩的感性を育むことを意識したい。

これら二冊の書籍については近いうちに一読目を開始しようと思う。その際には音読をして、まずは詩のリズムを味わっていく。意味の解釈はその後だ。最初に意味の解釈をしようと思うと詩的言語の世界には深く入っていけない。また、黙読をしていてもダメだ。詩には黙読では感得しえない固有

のリズムがあり、それは声に出して読んでみなければわからない。意味の解釈を最初に行なうこと、そして黙読で詩を読むことは、過去に詩の世界に入り損ねたことの大きな原因である。そうしたことを踏まえ、音読をしながら詩集を読んでいくことを徹底させたい。

昨日街の古書店ISISに立ち寄った。そこで五冊ほど古書を購入した。二冊はシュリ・オーロビンドが執筆したものであり、それは“Hymns to the Mystic Fire (1985)”と“Collected Poems (1986)”である。二冊の書籍はどちらも以前に購入しようか迷ったものであり、それらがまだ店内に残っていたことを嬉しく思った。そして他の二冊としては、クリシュナムルティが教育について語っている“Krishnamurti: Beginnings of Learning (1975)”と“Krishnamurti: On Education (1974)”を購入した。クリシュナムルティの教育思想についてはより深く知りたかったため、数日前に英国のアマゾンから二冊ほど別の書籍を取り寄せていた。今回古書店で上記の二冊を入手できたことを嬉しく思う。

最後の一冊は、英文学のコーナーでずっと悩んでいたのだが、運命的に発見したウィリアム・ブレイクの詩集“William Blake: The Complete Poems (1977)”を購入した。私の中ではブレイクは詩人というよりも画家としての印象が強く、本書を手にとって初めてこれほどまでに詩を創作していた人物なのだと知った。本書は1000ページを越す大著だが、今後少しずつブレイクの詩を味読していきたい。これら五つの書籍をレジに持って行くと、今日は店主のテオさんの奥さんがレジを担当していた。

私が会計を済ませようとしていたところに、テオさんもレジにやってきたので、二人に「今日無事に修士課程を終えました」と述べた。二人は祝いの言葉を私にかけてくれた。店主のテオさんは続けて、「先日大量に購入していた書籍はもう読んじゃったのかい？」と笑顔で述べた。それに対して私は「まだ全てを読んだわけではありませんが、この夏は時間があるのでもっと本を読みたいと思いまして」と笑いながら答えた。

レジで会計を終えた時に、テオさんの奥さんが「とてもいい本を購入したわね」と述べてくれた。私はその言葉を胸にしまって古書店を後にしたのを覚えている。

明日からは徐々に詩的世界に入っていくことになるだろう。詩の世界が自分の内側に流れ込んできたことの幸せをここに書き記しておく。フローニンゲン：2018/7/5（木）20:25

No.1118: On a Cold Morning

As well as yesterday, this morning is very cold. I'll start today's work at my own pace.

Groningen, 09:24, Sunday, 8/12/2018

2793. 暗算・リーガ・長岡京

今日は五時半に起床した。六時を回ったあたりからゆっくりと一日の活動を始める。

昨日と同様に、今朝も空が曇っている。天気予報を確認するとこれから少しずつ雲が晴れていくようだ。今日の最高気温は19度とのことであり、昼食後に散髪に出かける時は少しばかり肌寒い気温となりそうなので、今日は長袖を着て外出する。

フローニンゲン大学での二年目のプログラムを終えて二日目の朝を迎えた。今朝方の夢について少しばかり思い出す。夢の中で私は、実際に通っていた高校の教室の中にいた。そこには当時の級友たちがいて、その時間はちょうど数学の時間だった。

私は教室の右列の一番後ろに座っていて、幾分上の空で授業を聞いていた。授業も終わりに差し掛かった時に、突然先生が私を指名し、黒板に書かれている問題を解いてくれと述べた。その数学の先生はとても優しそうな年配の男性教師である。私を指名した時も笑顔であった。

指名を受けた私は黒板を一瞥し、黒板上で問題を解くまでもなく回答をすぐさま述べた。

私:「答えは-3ですね」

数学教師:「どうやって解いたんだ？」

私:「暗算です」

数学教師:「黒板上でその計算プロセスを教えてくれ」

先生は私が暗算で問題を解いたことに驚いた表情を見せていた。そこでまた笑顔で私に黒板上でその計算プロセスを教えて欲しいと述べてきた。

私は席から腰を上げ、黒板の方に向かっていった。白いチョークを握った瞬間に、自分の暗算がどうやら間違いであったことがわかった。実際に黒板上で計算をし始めてみると、その間違いは明らかだった。私は黒板上で再度計算をした上で先ほどの回答が間違いであったことを述べて訂正をした。

そこで夢の場面が静かに変わった。次の夢の場面では、小中学時代の女性友達の何人かと地図を眺めていた。それは世界地図であり、日本の地理も詳しく載っている。一人の友人が地図を指差して何か説明を始めた。そして、私に質問をしてきた。その質問内容は、地図上のこの長い一本の道は直線かどうかというものだった。

私はその質問に対し、「地図上は若干の曲線を描いているが、実際にその道を歩いている時は直線のように感じられる」と述べた。つまり、実際の道を歩いている時の体感上は直線であり、地図上でその道を眺めると曲線のように感じられるということを説明した。すると今度は別の友人が一言名の知れぬ都市の名前をつぶやいた。

女性友達B:「私、リーガに行きたい」

私:「リーガ？」

女性友達B:「うん、ラトビア共和国の首都の」

私は「リーガ」という都市名を聞いた時、最初は全くピンとこなかったが、彼女がラトビア共和国の首都だと述べた時にその都市について思い出した。以前中国人の友人がラトビア共和国を含めたバルト三国の素晴らしさを私に力説してくれたことがあり、その時にリーガの名前を一度聞いたことがあった。

彼女にリーガの魅力を訪ねようとしたところで、今度は日本でお世話になっていた知人の方がその場に現れて、「長岡京」の素晴らしさについて説明を始めた。長岡京についても名前を聞いたことがあるが、それがどこに存在しているのかわからなかった。その知人の方は説明を続け、長岡京の雅な街並みと、特に温泉が素晴らしいと述べていた。結局長岡京がどこにあるかわからないまま夢から覚めた。

目覚めてから長岡京について調べてみると、それは日本史上、平城京から平安京に都が移される間に日本の都として機能していた場所だと知った。都として機能していたのは784年から794年のわずか10年ほどである。

長岡京についてもう少し調べてみると、その10年の間に暗い歴史があったらしいことがわかった。夢の中で出てきた知人は確かに私が知っている人物のはずだったのだが、どうもその人物の身元が怪しくなってきた。もしかすると、実際に長岡京で生きていた人物、もしくはその生まれ変わりなのではないかという考えがよぎる。なんとも言えない感覚を残す夢から今日をスタートさせた。フローニンゲン:2018/7/6(金)06:53

No.1119: Yellow Passion

There is a throng of clouds in the sky, and it makes me feel coldness. However, I can feel yellow passion arising inside myself. Groningen, 12:14, Sunday, 8/12/2018

2794. 変容の里程標

灰色に曇った空の下を何羽かの鳥たちが飛んでいる姿が目に入る。今日は微風がひっきりなしに吹いている。空全体が雲に覆われているため、街全体が陰って見える。時刻は午前七時に近づいてきた。

少しばかり今日一日の活動計画について書き留め、そこから一日を本格的にスタートさせたい。欧州での三年目の生活はこれまでの二年間以上に自己規律と克己が必要になる。というのも、これまでの二年間はフローニンゲン大学に所属していた都合上、大学のリズムに合わせて日々を形作っていけばよかったからだ。そこから一転して欧州での三年目は、完全に自由になる。

何の制約もなく、自分が探究したいことを探究したいだけ探究することができる。さらには、創造活動についてもそれに従事したいだけ従事することができる。一方で、何もしたくないのであればとことん何もしなくていいという生活を送ることもできる。一切の制約がない自由の中でこそ、自己規律と克己心が試されるように思う。

自由というのは甘くない。制約がないというのは天国への道と堕落への道の双方を親切にも用意してくれる。そこで試されるのはその道に直面した人物の人間性である。とりあえず私は堕落への道を歩まないためにも、あえて自ら制約を設けながら正しい道を歩いていきたいと思う。制約を設けるというのは至ってシンプルであり、例えば早朝にその日になすべきことを日記として書き留めること、その日の活動の都度に気づきや発見を書き留めていくことなどである。

文章を書くことによって自らの道を形作っていく。それはもしかすると制約というよりも、単なる自己規定と呼べるものかもしれないが、とにかく文章を書きながら、文章の歩調に合わせて正しい道の上を進んで行く。それを今日からより一層心がける。

ここ数日間の間に詩への関心が爆発的に高まった。実際に幾つかの詩集をすでに購入した。絵画や音楽に対する関心のみならず、詩に対しても関心を持った自分はどうかしてしまったのだろうと昨日思った。そこで間髪を入れず、「どうかしてしまった」と思えることが変容の証であると思った。

自己が全く別の次元に参入する時、「自分はどうかしてしまったのではないか？」と思うのは当たり前である。逆にそれが感じられなければ、変容など一切していないことになる。

これまで何度も述べてきたが、真の変容は非線形的であり、そこでは以前の自己との大きな乖離が生まれる。関心事項が大きく変わるということはあってしかるべきであるし、真の変容体験を経た時には必ずそれが起こるのではないかと思う。

関心事項が同じというのは、結局過去の自己を引きずっていることを意味しているように思えてしかたない。「自分はどうかしてしまった」という気づき。真の変容を示す実に明確な里程標がここにある。また、詩への関心のみならず、最近は再び投資の勉強と実践を始めている自分がいる。覚者の詩を読み、過去の偉大な芸術家の絵画や音楽を鑑賞し、それに並行して、大学時代に熱を上げていた投資の勉強を再び開始している自分がここにいる。

芸術教育、霊性教育、そして投資教育。この異質な組み合わせがこの現代社会で生きていく上でどれだけ大切なことか。一方で、これらのうちの一つだけを強調する愚鈍な人間がどれだけいることか。それらのうちの一つだけを重視する人間は、それら全ての教育の重要性に気づけない人間と

同様に盲目である。これまで何人もそのような人間を見てきた。前者二つの教育は内面の豊かさをもたらすのに必須な教育であり、後者は外面の豊かさをもたらすのに必須な教育だ。

この現代社会で真に幸福感を得るためには内外のどちらの豊かさも必要なのである。おそらくそれがこの現代社会における統合的な生き方なのだろう。

米国西海岸で生活をしていた時、霊性だけを追いかける金に困窮する人たちを数多く見てきた。彼らは金がないことがもたらす困窮を霊性の探究によって乗り越えようとするが、それは原理上不可能である。なぜなら両者は別の実践領域だからである。一方で、金だけを持つ心の貧しい人たち、霊性の欠如した人たちも数多く見てきた。彼らは互いにこの世界に盲目なのである。

内面も外面も相互作用を及ぼしているのであるから、二つの領域の勉強と実践は不可欠であろう。芸術教育、霊性教育、そして投資教育への関心がより一層高まり、少なくともまずは自らにそれらの教育を課そうと思う。フローニンゲン:2018/7/6(金)07:18

2795. 芸術教育・霊性教育・投資教育

今日はこれから過去に作った曲を二つほど編集する。その後、編集の流れを引き継いで、バッハの変奏曲に範を求めて一曲作る。一旦ショパンのマズルカから離れ、再びバッハの変奏曲に範を求めていく。昨日もバッハの変奏曲とコラールに範を求めて二曲作り、モーツァルトの曲を参考に一曲作った。

今日からまたしばらく古典派の作曲家に範を求めていくことになりそうだ。今、書斎の中にはエマニュエル・シャブリエの曲が鳴り響いている。フランスのこの作曲家は幼い頃からピアノの演奏に才能を発揮していたそうだが、最初の職業は公務員だったそうだ。シャブリエは公務員として働く傍ら、フォーレなどと親交を持ち、独学で作曲の勉強をしていったそうである。また、マネ、モネ、セザンヌといった画家とも親交があり、絵画への関心も高かったことを知る。独学で作曲の勉強をしたという点、そして絵画へ関心を示したという点が共感を呼ぶ。

早朝の日記で、芸術教育、霊性教育、投資教育について少しばかり触れていたように思う。先ほど一日分のコーヒーを作っている最中に、全ては心だと言うのは唯神論的すぎるだろうし、全ては金

だと言うのは唯物論的すぎるだろう、ということを考えていた。この現代社会には片方の陣営の人間が多すぎる。仮に両陣営の中間に立場を取ったとしても、心についても金についても勉強しない人が圧倒的多数なのだ。

そのようなことをぼんやりと考えているとコーヒーができた。そこでまた極端な考えだが、どこか見逃すことのできない考えが浮かんだ。結局、現代社会の学校で教わるような科目型教育は私たちの幸福にほぼ寄与しないのではないかという考えだ。端的には、それは心についても金についても何一つ真実を教えない欺瞞教育なのではないか。

現代社会の科目型教育は結局のところ、最終的には将来金を稼ぐという目標に還元されていくという特徴を持つ。それがタチが悪いのは、結局金を稼ぐことだけに従事するように無意識的に仕向けていくこと、つまり人生を単なる金銭獲得のための労働に無意識的に縛っていくことが気づかれない形で巧妙になされていることだ。

結局、現代社会の学校では投資教育の劣化版の教育が施されているのだと思う。投資の本質が理解できれば、人生を単なる金銭獲得のための労働に捧げることなどありえないと思うのだ。学校では当然ながら表立っては言わないが、各科目を学ぶことの意義のベールを剥いでみると、結局そこには将来良い仕事に就くためや高い給料を得るため、という隠れた目的があるはずである。

そのようなことを考えてみると、つくづく学校というのは本当のこと、あるいは大切なことを教えてくれない場所なのだと思う。そこでは、心についても金についても何一つ本質的なことを教えず、教えられるのは将来金を獲得するための労働につながることばかりである。そこでなされているのは、金銭獲得に勤しむことを善なる行いとして盲信させることを巧妙に促すことである。

表面的な知識だけが教えられ、人生の全てを金銭獲得のためだけの労働に捧げるように仕向けていく現代の教育には本当に大きな問題があるように思えて仕方ない。芸術教育、霊性教育、投資教育の重要性については今後も考えを深めていきたいと思う。三つの教育の柱のうち、今日は霊性教育に焦点を当て、一昨日に街の古書店で購入したクリシュナムルティの教育思想に関する書籍を読み進めていく。フローニンゲン：2018/7/6（金）07:49

2796. 美容師メルヴィンとの対話より

早朝の曇り空が嘘のように今は晴れ間が広がっている。つい先ほど散髪を終えて自宅に戻ってきた。今日もフローニンゲンの街には初夏の爽快な風が吹いている。その風に乗って未知なる場所に行くのも悪くないように思えてくる。

今日はいつものようにメルヴィンに髪を切ってもらった。毎回メルヴィンとの対話から得るものが多く、今日も静かな気づきを幾つか得ていた。

席に着席し、髪を切ってもらう前に開口一番、フローニンゲン大学での二年目のプログラムが無事に終了したことをメルヴィンに告げた。メルヴィンも大変喜んでくれ、祝福の言葉をもらった。「プログラム終了後は何をするのか？」という問いに対して私の口から出てきた言葉は、「少しばかり休暇を取る」というものだった。それに対してメルヴィンは「休暇の後はどうするのか？」とさらに問いを重ねてきた。そこで私が思わず述べたのは、「音楽を作って詩集を読む」というものだった。意図せずに純粋に出てきたその回答が欧州での三年目の生活のあり方を物語っているように思う。

作曲実践と詩集をゆっくりと読み進めていくこと。欧州での三年目の生活は本当にそれらの実践が核となるだろう。

その後、メルヴィンとの会話は夏期休暇に関するものとなった。実質上、私は一昨日から夏期休暇に入り、それは夏期休暇の始まりであるのと同時に、一年間の休暇かつ一年間の本格的な創造活動の始まりでもあった。

メルヴィンはこの夏は忙しいらしく休みが取れないそうだ。しかし九月にマジョルカ島に行くらしい。フローニンゲンからどのような経路で行くのかを尋ねてみたところ、フローニンゲン空港から直行便が出ているとのことである。そういえば先日ロンドンへ行く際に、フローニンゲン空港のロビーの掲示板にマジョルカ行きのフライトがあることを知ったのを思い出した。

メルヴィン曰く、マジョルカ島までは二時間半ほどのフライトであり、往復60ユーロ（約8千円）で行けるらしい。スペインのマジョルカ島がそんなにも身近なところにあるなんて知らなかった。そこからは、

ポルトガルの首都リスボンにメルヴィンが以前訪れた時の話となった。メルヴィン曰く、リスボンはアムステルダムと比べてより時間の流れが緩やかだそうだ。

正直なところ、東京やニューヨークで生活をしたことのある私にとってみれば、アムステルダムの時間の流れですらゆっくりと感じるのだが、リスボンの時間の流れはそれ以上に緩やかだそうだ。ポルトガル語圏やスペイン語圏にはこれまで縁がなかったのだが、近々ポルトガルやスペインに訪れてみたいという気持ちが少し湧いてきた。

メルヴィンは十月から新しく自分の店を持つらしい。以前にもその話を伺っていたが、すっかりそれを忘れていた。聞くところによると、場所は今の店から遠くなく、より街の中心部に近い場所に店を構えるそうだ。店が開店したらまたメルヴィンに髪を切ってもらうことを約束した。

ちょうど私の前にメルヴィンに髪を切ってもらっていたのは、フローニンゲン大学のコミュニケーション専門の教授らしく、自己表現と脳の関係について研究をしている人物だそうだ。私が冒頭に詩を読むことに関心を持ち始めたことを伝えると、メルヴィンから面白いフィードバックを得た。そのフィードバックには考えさせられることが随分とあった。やはり私は、科学的な言語で自己を表現していくことをここで一旦離れ、そこで用いられる脳の部位とは真逆の部位を用いる作曲や詩を読むことに向かっているという対極的な動きをここに見ることができる。

詩集を読むことのみならず、詩を実際に創作するかもしれない予感がここ最近少しずつ芽生えていたところに、メルヴィンからもそれを後押しするような言葉掛けがあった。メルヴィンは長い間ダンスに打ち込んでおり、歌を歌うことも好んでいるらしい。そうしたこともあり、自己表現に関しては一家言あり、それをもとに対話をするのはいつも大きな気づきを私にもたらす。

「人は失敗を恐れるが、失敗というのは結局のところ、自己が認識することのできる半分の情報をもとにした判断でしかなく、残り半分の情報からみればそれは失敗ではない。また、認識できる僅か半分の情報によって判断された失敗というものが、結局のところ自己を押し広げていく」というメルヴィンの言葉には同意するものがある。

絶え間なく自己を表現し、失敗らしきものを積み重ねていくことが自己の認識世界を拡張させ、それをより豊かなものにしていく。そんなことを考えていた。フローニンゲン：2018/7/6（金）14:16

2797. 初夏のある土曜日の始まりに

今朝は六時前に起床し、六時過ぎから一日の活動を開始させた。ここ二日間の曇り空とは異なり、今朝は快晴の空が広がっている。優しい黄色を発する朝日が赤レンガの家々を照らしている。現在風が一切吹いておらず、街路樹は静かにその場にたたずんでいる。とても穏やかな土曜日が始まった。

今日はこれから真っ先に、過去に作った曲を二つほど編集したい。それらを聴きながら喚起される感覚をデッサンとして残しておくという実践を合わせて行う。昨日改めて過去に描いてきたデッサンを眺めてみたところ、色彩の多様さと形象の多様さには驚かされた。自分で描いたはずの絵を眺めていると、全く飽きがこず、逆にそのシンボルの意味を考えてしまうことに没頭してしまうかのようだった。これからも毎日このデッサンを続けていき、折を見てシンボルが示す事柄について考えを巡らせたいと思う。

過去に作った曲を編集したら、その流れで作曲実践を行う。今朝もバッハの変奏曲に範を求めようと思う。昨日はバッハの変奏曲とモーツァルトの曲に範を求めて二曲だけ作った。昨日は夕食後からあれこれと調べ物をしていたため、三曲目を作ることはできなかったが、今日は三曲ほど作ろうと思う。

毎日三曲作るということが徐々に習慣になってきており、三曲を作らなければどこか違和感を覚えるようになってきた。これは私にとって大変良い兆候だ。これはまさしく習慣の形成期において起こる固有の感覚であろう。

早朝に一曲ほど作ることができたら、その後にメシアンが執筆した作曲理論の解説書“The Technique of My Musical Language (1944)”を読もうと思う。本書は大判のテキストであるが、分量としては100ページほどなのでそれほど多くはない。今回は初読ということもあり、まずは全体の構成と中身の様子を確認するように読み進めていきたい。おそらく今日の午後あたりに一読目が終わるだろう。

メシアンの書籍を読み終えたら、現在協働執筆中の書籍のレビューを行い、自分の担当箇所の文章を執筆していく。現行のレビューに十分な時間をかけ、補足説明が必要だと思われる箇所に自

分のコラムを挿入していく。今回の章には少なくとも一つのコラムを設け、最大二つのコラムを執筆していこうと思う。本日中に取り組みたいことはだいたいそれぐらいであろう。それら全てが早めに終わったら、引き続き作曲実践に取り組んだり、先日届いたルーミーやマラルメの詩集を読み進めていきたい。そうした形で本日を終え、明日の日曜日につなげていきたいと思う。

静かで、それでいて情熱的な初夏の休日の一日が今始まろうとしている。フローニンゲン：2018/7/7（土）06:55

2798. 一瞥体験と叡智の泉

無風の世界を窓越しから眺めていると、この世界がただそこにあるべき形であるということがわかる。世界はあるのだ。

昨日、散髪に行くために街を歩いている最中、この世界の実在性と自己の実在性について考えていた。また、覚醒意識下で「ある」と思っている世界とは別に、例えば夢の世界も含めて、覚醒意識では理解しがたい世界も歴然とあることについても考えていた。それらは全て幻影的なのだが、幻影を通り越した先にある幻影を生む根源に実在の本質があるように思えてくる。

先日、井筒俊彦先生が執筆したルーミーに関する説明を読んでいると、ルーミーが「この世界は『例えば』のような世界なのだ」という趣旨のことを述べていたことが大変面白いと思った。この世界は多分に比喩的であり、比喩そのものなのだろう。

一昨日に、書斎の窓際に小鳥がやってきた時、私はその小鳥をずっと眺めていた。その場から小鳥が飛び立つまでずっとその小鳥を見つめていた。その最中、小鳥がこの世界にあることについてずっと考えていた。毎回のように、自分とは容姿がまるっきり異なるこのような生命がこの世界に存在していることに対して打たれるものがあった。

見ているものも見られるものも多分に幻影的なのだが、それらを単に幻影であると括ってしまうと問題が起きる。個別具体的な問題についてはここでは取り上げない。両者を共に単なる幻影だとみなしてしまうと、幻影を生み出す存在者の姿が見えなくなってしまう。存在者と出会うためにはどのような手段が考えられるのかについて考えを巡らせていた。

見るものも見られるものも、それらは幻影であると一瞬宙に上げ、そこから間髪を入れずに二つの幻影を生む存在者の姿を確認しなければならない。これは言うは易く行うは難しだ。だが、最近この方法がうまく行き始めている。見るものと見られるものという幻影を生む存在者、つまり幻影の創造者の顔を捉えることがここ最近は増えているように思う。

もしかすると、これが俗に言う「一瞥体験」なのだろうか。昨日道を歩きながら、自分がこの世界に確からしくいることを笑ってしまったのだが、そうした笑も一瞥体験の一種なのかもしれない。

昨日はシュリ・オーロビンドの書籍 “The Life Divine (1960)”を読み終えた。本書は1300ページに及ぶ大著であり、ケン・ウィルバーもよく引用に使っていた書籍である。なぜウィルバーが本書を頻繁に引用していたのかがわかるような、非常に洞察に溢れる記述が随所に散りばめられていた。下線や書き込みの数が、本書が私にとって大変意義のある書籍であるということを物語っている。

本書を読みながら、オーロビンドにせよ、ブラヴァツキーにせよ、ルーミーにせよ、彼らは一様に叡智をその根源の泉から汲み取った媒介者だったのだということに気づく。でなければあのような膨大な仕事を成し遂げることはできないだろう。

ここで彼らの偉大さに気づくと共に、どうやら叡智の源泉というものが存在していることに気づき、さらにはそうした根源に何らかの手段を持ってアクセスが可能だということがわかる。彼らはまさに特殊な認識能力を活用してそこにアクセスし、叡智の泉と自己を媒介させる形で膨大な仕事を残していった。また何より興味深いのは、例えば三人はそれぞれ異なる仕事を残しているのだが、彼らの仕事をよくよく眺めてみると、それらは必ずどこかで繋がっているのだ。そのどこかがまさに、「叡智の泉」だと言えるのではないかと思う。

この夏、ブラヴァツキーが執筆した1600ページにわたる“The Secret Doctrine: The Synthesis of Science, Religion, and Philosophy (2014)”及びルーミーの詩集“The Essential Rumi (1995)”を読むことによって、叡智の泉に触れるだけではなく、自らがその泉から絶えず真実を汲み取っていく媒介者になる方法を模索していこうと思う。フローニンゲン：2018/7/7（土）07:20

2799. オーロビンドとクリシュナムルティから

以前から少しずつ、オーロビンドやクリシュナムルティなどの覚者が執筆した書籍を読むようになった。昨日もオーロビンドが執筆した書籍を読んでいたのだが、そこで二人が同一の事柄を指示していることに気づいた。

外見上は異なるのだが、よくよくその意味内容を確認してみると、二人の指示は一致している。主題としては自己の発達と括ることができるものについて、オーロビンドは内化（involution）から外化（evolution）が始まり、その逆ではなく、発達は内化から始まることについて指摘する。一方、クリシュナムルティも同様に、形式的な教義や信条、儀式によって真理に到達することはできず、徹底的な自己認識を通じてのみ真理に至るということを指摘する。つまりクリシュナムルティも発達の起点を内化に置いていることがわかる。

クリシュナムルティはあるがままの観察が我執からの解放につながると述べているが、おそらくあるがままの観察だけでは足りないだろう。「観察」の先にある何かしらの行為・実践が必要になるはずだ。起点は観察という内化なのだが、観察だけでは内化にとどまる。内化を外化につなげていく何かしらの行為や実践が不可欠となるはずだ。

我執からの解放というのはまさに、内化を起点にして外化が実現した時に成し遂げられるものなのではないかと思う。もしかすると、内化によって得られた発見や感覚を外側に形にしていくということがまさに外化に他ならないのではないかという考えが浮かんでくる。そうであれば、内化によって得られたものを外側に表現することの意義と重要性が見えてくる。また、内化によって喚起されたものを外側に表現するための手段を獲得していくことの大切さも見えてくる。

まさにこの点に、芸術教育と霊性教育の大きな意義があるのではないかということが見えてくる。両者の教育はどちらも共に内化を促すことを目的にしており、とりわけ芸術教育は、内化によって得られた感覚を外側に表現するための手段を提供することに寄与するべきものである。そして霊性教育は、内化の産物を芸術教育によって形とした後に、それを我執からの解放という外化につなげていくべき役割を果たすものなのではないか。そのようなことを考えていた。

オーロビンドにせよ、クリシュナムルティにせよ、彼らが残した書籍を単に覚者の言葉として捉えるだけではなく、芸術教育や霊性教育の役割と意義、そしてその可能性について考察を深めるために今後も読み進めていきたいと思う。

今日はいつにも増して穏やかな土曜日である。時刻は午前八時を迎えようとしているが、辺りはとにかく静かだ。通りを走る車はほとんどない。道を歩く人の姿もまだほとんど見ていない。ただ静かに世界がたたずんでいるだけ。そのような印象を私に与える。

今は小鳥の鳴き声もほとんど聞こえておらず、ただ虫の鳴く声が聞こえる。ここから今日の活動をゆっくりと開始することにしたい。フローニンゲン:2018/7/7(土)07:47

2800. 文化的な条件付けと人間発達

土曜日が静かに終わりに近づいている。時刻は午後の八時に近づいてきており、今は夕日が最も美しい時間帯だ。午後十時を過ぎてからでなければ沈まぬ夕日を眺めていると、今この瞬間に考えなくてもいいことを考えてしまった。それは、後二ヶ月もすれば日が暮れるのはすっかり早くなっているであろう、ということだった。

この短い夏の期間が終われば、長く厳しい冬の季節がやってくる。欧州で迎える三回目の冬は、これまでとはまた違ったものになるだろう。これまでは大学に所属していたが、今年の冬はどこにも所属しないまま過ごしていくことになる。以前から、私はどこか特定の組織や機関に所属しようという思いはほとんどない。

この冬は一人で書斎にこもって黙々と探究活動と創造活動に精を出す毎日を迎えることになる。そうした日々を何を思い、何を考えながら過ごしていくのか。何が自分の根幹的な支えになるのかを見つけながら日々を過ごしていく必要がある。この冬を乗り越えれば、おそらくもう私は完全に何かから解放されることになるだろう。

どこにも所属せず、何にも縛らず、ただ自分の望む探究活動と創造活動だけを続けていく毎日。その実現を強く望む自分がいる一方で、それを実現させるためのカギはこの冬の生き方にあることを

知っている自分がいる。この冬がやって来ることを否定的に捉えるのではなく、肯定的に捉えていく。そもそもあるがままの冬には否定も肯定もないことをまずもって認識しなければならない。

今日はこれから“Krishnamurti: On Education (1974)”の続きを読み始めていく。午前中に本書を読んでいると、いくつか重要な気づきを得た。クリシュナムルティが述べているように、真の教育とは何か特殊な技能を教えることよりも、社会の流れに溺れないようにすることを教えることに重きが置かれる必要が本来あるのではないかと思う。言い換えると、社会に従順に従うのではなく、また社会の流れに盲目的に流されていくのではなく、この社会を批判的に眺めうる力を授けることを大切にする必要があるのではないだろうか。

確かに子供は一度社会の仕組みを学ぶ必要があることは確かである。しかしそれは本来、社会に従順に従えということを意味しないはずである。とりわけ成人にとっては、社会によって条件付けられた精神を開放することが教育の真の目的であろう。

決して社会に縛ることが教育の目的ではなく、社会を対象化し、社会から自己を解放することによって、再び社会に参画することを促すことがその目的のはずだ。クリシュナムルティが同様の趣旨のことを述べており、大変共感を覚えた。

結局、多くの人にとってはエアーコンディショニングとカルチュラルコンディショニング（文化的条件付け）は同じほどに心地良いのだ。だから多くの人は文化的条件そのものを対象化しようとすら思わないのだ。それが結果として、自らを既存の社会的枠組みや発想に縛ることを招く。

文化的な条件付から自己を解放するための方策について考える。これは非常に難しい。クリシュナムルティも似たようなことを述べていたが、やはりこれまでの自分の経験を振り返ってみても、まずは自らの存在が、所属する文化によって条件付けられていることを強く自覚する必要があるように思う。この気づきからスタートさせなければどうしようもないように思う。それではそうした気づきはどうやったら生まれるのだろうか。

これは正直なところ、その国に留まっている限り実現は難しいのではないかと思う。所属する文化にいながらにしてその文化を対象化できる人間は、本当に極々少数だ。これまでの経験上、やはりそれは一度国を離れて生活をしてみて始めて実現されるものだと思う。自分自身を振り返ってみると、

日本の文化的な条件付けを対象化し始めたのは、間違いなく米国に住み始めてからであったし、米国の文化的な条件付けを対象化し始めたのは、欧州に住み始めてからであったように思う。

これから私は、欧州をいつか離れることによってこの土地の文化的な条件付けを対象化することになるだろう。様々な国で生活を営めば営むほどに、種々の文化的な条件付けに気づいていく。そしてそれらから徐々に解放されていく自分がいることにも気づく。こうした解放が自己そのものへの認識を深め、自己の囚われからも自己を解放していくことにもつながっていく。

日本を離れて生活してまだ七年ほどであるため、国の外で物理的生活および精神生活を営むことについてはまだまだ未知なことが山積みである。そうした未知を既知に変換していくことがこれからも、そして一生続いていくのだと思う。フローニンゲン：2018/7/7（土）20:20

© YOHEI KATO 2018